

I は し が き

石川・岐阜・福井の各県にまたがる白山山系には鮮新世～第四紀に形成された白山・丸山・大日山・大日岳・経ヶ岳・願教寺山の各火山がある（図1-1）。それらのうち、白山火山だけが有史時代の活動記録をもつ火山である。白山火山は金沢市の南東約50kmに位置し、石川・岐阜の両県にまたがっている。頂上部は御前峰（2702m）・剣ヶ峰（2660m）・大汝峰（2684m）の三主峰からなり、頂上及びその周辺部には火山地形がよく残されている。

白山地域に火山活動が開始されたのは今から約30～40万年前で、当時の活動中心は加賀室跡付近であった。その後、侵食期をはさみ、活動場所は中ノ川上流の地獄谷へ、さらに現在の山頂部へと移動し、現在の山頂部を中心とした活動は今から数百万年前頃に開始されたと考えられている。山頂部及びその周辺地域には、泥炭層にはさまれて20枚近くの火山灰層が確認されており、それらは約11,000年前以降に白山火山の活動によって形成されたものである。それらによると、2,000～3,000年前と、8,000～9,000年前の2回にわたって比較的規模の大きい噴火があったことが知られている。3,000年前以降に限っていえば、7層の火山灰層が確認されており、平均するとおよそ430年に1回の割合で白山火山は活動していたことになる。山頂部を中心とする活動は歴史時代まで続き、歴史時代に10余りの活動があったことが知られており、最も最近のものは万治2年（1659年）の活動である。

本報告は、白山自然保護センターが昭和64年度から平成2年度にかけて行ってきた”白山火山噴火活動調査”事業の成果をまとめたものである。白山火山の特徴を火山灰層・古文書の記録・重力・磁力・地震などの面から明らかにしようとするものである。活動史については約10,000年前以降について重点をおいた。白山火山の重力や磁力・地震などの地球物理的性質については、これまでほとんど研究がなされてなかったもので、今回新たに取り組んだ分野である。

本報告のうち、Ⅷ章は石川県白山自然保護センター研究報告第16集に”1935年に白山の千仞滝に出現した”噴気孔”について”と題してすでに公表されたものに、2, 3の図を追加したものである。Ⅸ章は今回の調査をもとに、東野が取りまとめた。

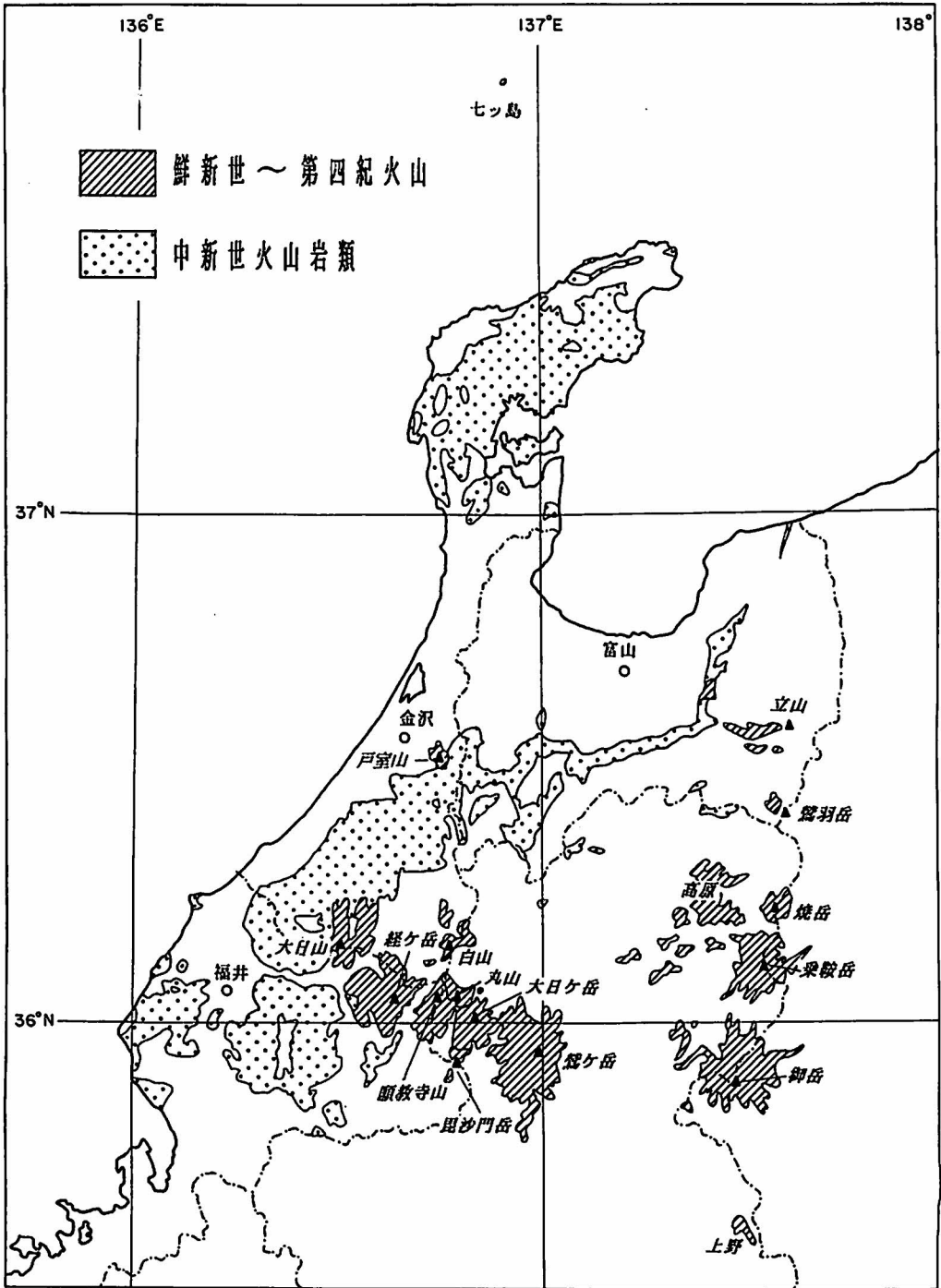


図 I-1 北陸地方の第三紀中新世～第四紀火山岩類の分布
(100万分の1「日本地質図」(地質調査所, 1978)を多少改変)